
別色に染まるなら

赤下一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別色に染まるなら

【Nコード】

N9607Z

【作者名】

赤下一葉

【あらすじ】

気づいたときにわたしは100年間も同じことを繰り返していた。彼こと 狼さん は気づかないのに、わたしは気づいている。わたしの精神が限界に近づき、この世界の 物語 を壊すか、それとも 物語 の人形とされるがままにするかの選択が迫られた。わたしこと 赤ずきん が導き出した結論が、この 物語 を大いに変えることになった。

【1】気にかけて

わたしは間違っただことをした。

この 物語 を壊してしまったから。

してはいけない事をしてしまったから。

自分の欲に負けてしまったわたしが悪いのか。それともこの 物語 が悪いのだろうか。

どちらにしろわたしが決められ事ではない。

後はこの世界の 物語 に任せるだけ。

「もう、面倒ですよ」

「どうしたんだ、いきなり変なこと言って？」

相手に聞こえないほど小さな声で呟いた独り言は、致命的に相手に聞き取られてしまった。

しまったと最初は思ったけど、いつその事洗い浚い話してしまおうかとも思える。

相手もあまり興味が無いわけがなかった。わたしがそんな事を言うのがそれまで珍しいことなのだろうか。

「あなたには関係ないです。たとえ関係があったとしても、わたしはその関係を断ち切りたいです」

「相変わらずの毒舌をありがとう。まあ俺もお前とはあまり関わりたくないさ」

褒められた(？)のは嬉しかったが後の言葉はわたしの体に釘を打たれた気分だ。

何年もこうやって話合っている仲なのに、そこまで言うだろうか。

彼としては数ヶ月のようにしか感じていないのだろうが、わたしにとっては何年、何百年もこんな会話をしているように感じられる。どうしたら彼は気づいてくれるのだろうか。

言ったらいけないことだとはわかっていし、おかしくなっ
てしまつのも百も承知。

こんな自分を愚かだと思つ。

気づかない彼は馬鹿だと思つ。

「俺は馬鹿じゃないぞ」

「あつ。なんで分かるんですか、わたしの心」

彼は何時のまに読心術を覚えたのだろうか。

てか覚えられるのか？ 人間でもない彼が。

「口にてた」

「……………」

彼は人差し指をわたしの唇に押し付けた。

がんばれ、わたしのポーカーフェイス。

これという防御壁がなければわたしは茹蛸のように顔が染まるだ
らう。

そのせいで弄られるのは嫌だし、何しろわたしのプライドが許せ
ない。

彼は自分の顔に自覚があるだろう。

イケメンの類にはいるだろうその顔を近づけてくるのは確信犯な
のか、それとも無自覚なのか未だに分からない。

もっとも不覚なことは、も彼はわたしの意中の相手だと言つこと
だろう。

「気づかないって、何のことだ」

「それは肯定文であつて疑問文ではありませんよね。だつたら答
えを返す必要はありませんよね」

「違う。これは命令口調だ」

「ノーコメントです」

「答えろ」

「嫌です。そんな事より、までなんですか？ お花畑」

「おつ、おい待てよ！」

よかつた、あの事は言つてなかつたようだ。

話を切り替えて、お花畑がある場所に向かって少し早歩きした。彼は慌ててわたしを追いかける。

これは初めての出来事だ。

だっていつも彼が先を歩いていたらだ。

お花畑はどんな花があるだろう、どんな花を持っていくつ、とわたしは考えない。

どんな花があるのかはもう知っているから。

どんな花を持っていくかはもう決まっているから。

彼は気づかないから、知らないから言うけど。

気づかないことは、知らないことは罪ではありません。

でも、気にかけてはほしいです。

【2】その意味とは

「この花はなんでしょうか？」

唐突ですが彼とクイズをしています。

わたしたちは絶賛お花畑で花摘み中です。

「それは俺に聞いてるのか？」

あたりまえでしょ、あなたしか周りにいないのだから。

それとも、わたしの独り言とでも思ったのですか？

「疑問形でかえさないください。ついでに言いますが、馬鹿な
んですか」

「うっせえ。後、馬鹿は余計だ！」

これだから彼女ができないんです。

「イチイチ煩いですね。本当にあなたは春蛙秋蝉ですね」

「お前そんな言葉よく知ってるな。日本の四字熟語だっけな？
どいう意味だ？」

わたしはお花を摘んでいた手をとめ、彼と目線をあわせるように
顔を上げた。

「うるさいだけで、何も役に立たないことのとえです。あなた
は無用な人という意味です」

「俺は無用じゃねえぞ！ これでもそんじょそこらじゃ
何も言えないのですね。」

これだから無用なんですよ。

クスリと彼を馬鹿にするように笑った。

「それに、あなたは生きる意味を持っているのですか？」
「……………」

彼は黙り込んでしまった。

少し言い過ぎただろうか。

「俺は」

あ、口を開いた。

「俺達は、狼が生きる意味は、人を喰うことだ。でも俺は人間と狼の間に産まれた異端だ。俺にとって、人間を喰うことが生きる意味とは思えない。もしかしたら、生きていく必要すらないのかも知れないな」

珍しくネガティブな彼を見て内心焦ってしまった。

あーあ、どうしましょう。

このせいで彼が死に急ぐような事をしなければいいのですが。

「わたしがあなたに言うのもなんなのですが、命は大切にしてくださいね」

わたしは言い切ると、花を摘み始めた。

さつきとは違い、少し乱暴に。

彼の発言に怒っているのだろうか。

それとも何も言えない自分に怒っているのだろうか。

「雛罌粟」

はい？

「それ雛罌粟だろ」

手元にあったオレンジ色の花を無理矢理のように奪い取られた。

そんなに乱暴に取ったら花が可哀相です。

というのは建前で、本音は、

「はい、正解です」

彼が取った花から零れ落ちるように取れた花びらを拾い、見つめた。

可哀相な花びら。

取れた花びらはもう花ではない。

草同様の扱いになる。

まるで私のように。

「それにしても珍しいですね、雛罌粟と言っているのですか。こちらの方々はアイスランドポピーと言うのですけれどね」

「ああ、それはずっと昔、日本に行ったことがあってな。こんな森暮らしだったから、花の名前は殆ど覚えちゃったぜ」

日本に行ったことがあるんですか。良いですね一回行ってみたい
です。

「お前だって四字熟語知ってたじゃないか」

「あれは知り合いに、あなたのように日本に一回行ったことがある
方に聞いたのです」

10回ぐらいですよ。

何度も聞いているから覚えてしまいました。

「終わりました」

わたしは手に花を摘んで立ちあがった。

「この花だけ持っていきます。そろそろおばあちゃんも危篤です
から」

手には色取り取りのポピーと彼が乱暴に取ってボロボロになった
一輪のポピー。

私は花には優しい人間なので、自分が取った花は自分で処理しま
す。

「おい、それって」

「はい」

知らなかつたんですか、わたしは偽善者なんですよ？

「ポピーの花言葉は」

彼はわたしと色々な話をしていましたから、もう見抜いたと思
いますが、

「慰め、いたわり」

わたしは家族のことを、ただの血の繋がった他人にしか思ってま
せん。

真っ赤な嘘で染められた頭巾は、だんだんと色あせてきた。

【3】閑話 これが理由

何年かに一度、こんな事があつた。

わたしの父と呼べる人が他界したこと。

父が死んだことが何年かに一度の事ではなく、そこで生じる物

語のバクと言えるものだ。

バグはわたしという駒を蝕む敵みたいなもの。

その敵がわたしの残り二人内一人の血縁関係者である、母だった。

正確に言つと、バグにのつとられた母だ。

母は父第一の人で、娘であるわたしの事なんてなんとも思っていない。

父が死んだのはお前のせいだ。

お前は死を呼びこむ死神だ。

名前なんてお前につける必要はない、赤ずきんで十分だ。

私の幸せを奪つたお前には幸せになる権利はない。

そう言われ続けた。

頑張つて耐えてきたけど、もうそろそろ限界に近づいてきた。

バクにのつとられた母がない物語でもわたしは母を拒絶してきた。

母もそんなわたしを見て、わたしを元々いないような存在と見ていた。

しかしそんなわたしにも奇跡という言葉信じていた。

母との仲をもどきたい。

また仲良くしたい。

何回もやり直しても、嫌われても、拒絶されても、わたしは母のことが大好きなんだ。

おばあちゃんにそのことを相談した。

そしたら、「私がなんとかしてみようかい？」と優しく言ってくれた。

とても歓喜な気持ちになった。

おばあちゃんが神様のように見えた。

ありがとう、神様。

わたしに最後のチャンスをくれて。

おばあちゃんと母の会話をこっそり聞きにいった。

おばあちゃんの家のドアに聞き耳を立てて会話を聞いた。

「母さんには関係ないでしょ！ これはあの子と私の問題です、母さんは黙っててちょうだい！」

「それでも、赤ずきんはあんたのことを大好きだって」

「煩い、煩い！ 黙って、黙って！」

母の大声の狂言と家からはドタン、バタンと暴れる音が聞こえてきた。

何をしているのだろうか？

わたしはこっそりと窓から様子をうかがった。

ああ、なんとということだろう。

その言葉しかわたしはでなかった。

母が、おばあちゃんの首を絞めている。

「きゃあああああああああああああ！！！」

あまりの光景に口が開いてしまい叫んでしまった。

「っ！？ 赤ずきん……！」

母はもうおばあちゃんでもない亡骸を蹴り飛ばし、正気のない虚ろな目でこつちをギロリと睨みつけてきた。

「あうっ……、おばあちゃんが！ お、うっえ……！！！」

わたしはおばあちゃんの亡骸をみて嘔吐した。

さつきまで優しく笑っていたおばあちゃんが、もう息もできない他だの肉の塊のように見えた。これがさつきまで、しゃべっていたなんて思いもしない。

「あんたのせいよ。全部あんたのせい！ 夫が死んだのも、母さんが死んだのも、全部死神のあんたのせいよ、赤ずきん！」
もうこの人は狂ってしまっているようだ。

震えながらわたしを指す指。

片方の手には、近くにあった果物ナイフを持ち構えていた。

「あんたさえ、あんたさえいなければ！」

向かってくるナイフ。わたしの手元にはおばあちゃんにあげるためのパンやお肉が入ったバスケット。

バスケットを恐怖のあまり落としてしまった。

向かってくるナイフ。わたしの手元には何も無い。

恐怖のあまり腰を抜かしてしまった。

目の前まできたナイフ。わたしの手元には

十十

わたしの目の前には血の海が広がっていた。

目の前には母の亡骸。

胸にはコンバットナイフが刺さっている。

母の手元には果物ナイフがしっかりと握られていた。

そのナイフには血が付いている。

勿論わたしの血ではない、母の返り血が付いていた。

わたしにも返り血がついていた。

白いシャツは赤く染められていた。

わたしの手元にはさつきまで、コンバットナイフが握られていた。

「いいかい、赤ずきん。森や林には狼がいるから危ないんだ。もし行かなくちゃならない時は、このナイフを持っていきなさい。きつとお前を守ってくれるよ」

父が死ぬ数日前に言ってくれた言葉だ。

刺さっているナイフは父の形見と言ってもいい物。

このナイフは父が狩猟になった時に父親、つまりわたしのおじいちゃんに貰ったらしい。

「ただし約束するんだよ」

わたしの頭を優しく撫でて、父は言った。

「これで絶対人を刺してはいけないよ」

指きりげんまん。嘘ついたら、ハリセンボン飲ます。

「指きった」

これが最期の会話だったかもしれない。

「ああああああああああああっ！！ お父さん、ごめんなさい！ わたしはお父さんの最期の約束を破ってしまいました！」

こんなわたしを誰が許してくれるのだろうか？

神様そんなの嫌！

きつと神様はわたしのことを許してくれない！

わたしは嘆き、叫ぶことしかできなかった。

こんなことをしたら、物語が変わってしまう。

わたしは母におばあちゃんの家にお使いを頼まれて、おばあちゃんの家に行き、彼に会って騙されて、おばあちゃんが彼に食べられて

どうしよう、このままじゃ、彼にどうすれば……。

そうだ。

そうよ、

「あはははははー！！」

ついにわたしも狂ってしまったようだ。

蛙の子は蛙の子とはこういう事だ。

母のようにわたしは狂い嗤う。

変わってしまうなら、いつそのこと変えてしまおうではないか！
これはもう神に見放されたわたしの、わたしが作る 物語。

誰にも文句は言わせない、邪魔する者は蹴り落としてしまえばいい。

どんな相手であろうとも、わたしは負けない。

わたしは真つ赤に染められた家で誓った。

赤頭巾がなんで赤い頭巾なのか知ってる？

それはね、母親返り血を浴びて真つ赤に染まったから

赤ずきん になっただって。

これがわたしが偽善者になって、 赤ずきん になっただ理由。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9607z/>

別色に染まるなら

2012年1月6日22時50分発行